

# ABAに基づく特別支援学校初任者研修の効果検討

～専門家と連携して実施した校内研修～

○石津 乃宣

岡村 章司

(兵庫県立こやの里特別支援学校)

(兵庫教育大学大学院)

KEY WORDS: 応用行動分析学 初任者教員研修 専門家利用

## I. 問題と目的

初任者研修は教育公務員特例法を根拠に、新規採用された教員(以下、初任者教員)に対して実施されている。公立学校の教員採用者数は、平成13年度以降、増加しているが、公立学校教員の初任者が毎年300人前後、依願退職しており、初任者の研修システムの吟味と整備は喫緊の課題である(田子, 2013)。

応用行動分析学(ABA: Applied Behavior Analysis、以下ABA)は、人間の行動のあらゆる面に応用され、有効性を発揮している。特別支援教育においても、自閉症児・者における言語の獲得、社会的コミュニケーション技能、基本的な生活技能、地域参加技能の獲得が可能であることが多くの研究データから示されてきている(井上・井澤, 2007)。また、子どもの不適切な行動に対して、保護者・教員に有効な指導・支援方法を提供し、問題解決をはかることができるアプローチである(三田地・岡村, 2009)。宮崎・秦・宮崎・井上・川崎(2013)は、ABAに基づく校内研修モデルプログラムを開発しその効果を検討する中で、ABAに基づく指導を効果的に学ぶためには、理論的な知識の獲得と実際の子どもに対する指導場面において他者からの指導を受けるという二つが組み合わさっていることが必要と指摘している。

以上より特別支援学校教員が、ABAについて研修を深め、専門家に学校現場での子どもたちへの指導・支援の実践に指導助言を受けることはたいへん有効であると考えられる。学校現場で研修を通じて経験した子どもの変容は、初任者の今後の教員人生において大きな支えとなり得ると考える。

そこで、本研究においては、知的障害特別支援学校初任者教員を対象に、ABAに基づく講義・演習を含んだ研修と、専門家による指導助言を受ける初任者校内研修を実施し、その効果について検討を行うことを目的とする。

## II. 方法

### 1. 対象者

対象は、A県立B特別支援学校(知的障害)の初任者教員7名(男性2名・女性5名)であった。対象教員の年齢構成(201X年4月現在)は全員が20代であった(平均年齢は25.7歳)。教職経験年数の平均は3.1年(特別支援教育経験年数の平均は2.1年)であった。また、7名中4名が過去にABAについての講義や研修を受けたことがあった。なお、今回の発表について、対象者と所属機関等の承諾を得た。

### 2. 実施期間

201X-1年7月～201X年2月であった。

### 3. 手続

1) プレ・テスト: 対象者に教員経験年数などのアンケートを実施し、ABAについてどれくらい知識を持っているかを測るために、KB PAC (Knowledge of Behavioral Principles as Applied to Children: 志賀, 1983) を実施した。

2) 学習会の実施: 7～9月に3日間、各回90分、ABAについての学習会を実施した。教育系大学院の修士課程を修了し、ABAを専門とする教員に指導を受けたA特別支援学校教員1名が、学習会の内容立案、資料作成、学習会の講師を担当した。

学習会の内容は、三田地・岡村(2009)、井上・井澤(2007)を参考に、学校現場において必要と考えられるABAの基本知識、MAS (Motivation Assessment Scale) の演習、問題行動への対処に必要なストラテジーシート(井上・井澤, 2007)を用いた指導・支援を考える演習等の内容を立案した。学習会の実施には、資料や演習用のシートを用意し、資料にそって講義・演習を行った。

3) 専門家の指導助言: 9月～1月に3日間、ABAを専門領域とする大学院准教授に、初任者教員の「個別の指導計画」作成と、実際の指導実践について指導助言を受け、次回に向けての課題の提示を受けた。担任する児童生徒について目標を設定、記録を基に介入方法を検討、指導支援を実施した。次回の指導に向けて学習会講師が実践についての相談を受けたり助言を行い、初任者が次に向けて資料を作成し、再度、指導助言を受けた。

4) ポスト・テスト: 対象者に、1)と同様にKB PACを実施した。また、この研修についての評価を得るために事後アンケートを実施した。

## III. 結果

Table 1 KB PAC の得点結果

対象者	pre	post	増減
A	9	13	+4
B	15	16	+1
C	15	16	+1
D	6	13	+7
E	8	13	+5
F	10	14	+4
G	11	19	+8
ave.	10.6	14.2 **	
sd	2.17	2.51	

\*\*  $p < .01$

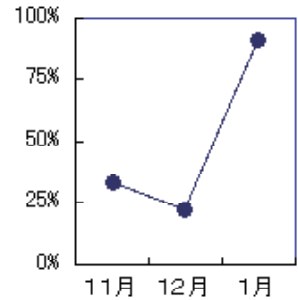


Fig.1 自発での絵カード使用割合

KB PACは、全25問を1問1点として採点した(25点満点)。プレ・ポ

ストのKB PACの得点結果、平均点等をTable 1に示した。対象者7名中、7名全員のKB PACの得点が上がった。また、事前事後の得点平均値についてt検定(片側)を行ったところ、有意水準1% ( $t = .0028$ )で有意に事後の得点が高い結果が得られた。初任者の取り組みの一例として、中学部3年男子生徒に絵カードを使ったコミュニケーション指導で、自発でのカード使用の割合が高くなる結果が出た(Fig.1)。他の実践においても、ほぼ良い結果が得られた。

事後アンケートの結果(抜粋)をTable 2に示した。10項目中、8項目において5段階評価で平均4以上のポジティブな評価があった。また、残りの2項目は平均3以上の評価であった。対象者7名全員が今回の研修に「参加して良かった」と回答した。

## IV. 考察

KB PACで対象者7名の平均点が有意に上がったこと、初任者が取り組んだ指導実践が概ね良い結果を示したこと、事後アンケートで研修についての評価が高かったことより、今回実施した校内研修は効果があったことが示された。

宮崎らの指摘のとおり、今回の学習会は講義・演習に加えて、大学院准教授(専門家)に「個別の指導計画」に基づく授業指導場面について具体的に指導を受けたことから、効果的にABAの指導を研修することができたと言える。また3回に渡る専門家の指導の間の期間に、学習会講師が初任者に実践の方向性、記録の取り方、資料のまとめ方などに助言を行い相談活動を行ったこと、専門家が指導助言の度に課題を提示し、叱咤激励を行ったことなどの環境設定もこの効果の要因であると考えられる。子どものポジティブな変化とアンケートの結果から、初任者の今後の教員人生においても有用に機能する可能性がある。

今後の課題として、今回この研修を受講した初任者が2年目以降、この取り組みがどのように維持・一般化されているか検証し、2年目以降のフォローアップを考えていく必要がある。

項目	Table.2 事後アンケートの結果	評価の平均
1	自分自身に有用であった	4.7
2	子どもをアセスメントすることができた	4
3	子どもに合った目標設定ができた	4
4	子どもの目標を達成するために、有効な指導の手だてを考えることができた	4
5	指導実践を記録することができた	4.3
6	子どもの目標達成について、客観的に評価できた	3.7
7	この指導実践で、子どもが伸びたと実感できた	4.6
8	この指導実践で、達成感を感じた	4
9	この指導実践で、同じクラスの担任からよい評価をもらった	4.1
10	自分が特別支援学校で教員として働いていくことができる自信が付いた	3.6

## ○参考文献

宮崎光明・秦基子・宮崎美江・井上雅彦・川崎聡大(2013) 応用行動分析学に基づく自閉症児への課題学習の指導に対する校内研修モデルプログラムの開発. とやま発達福祉学年報, 4: 35-44. (ISHIZU Norinobu, OKAMURA Shoji)